

## イヴ・フェラトン博士

# 「啓蒙主義からロマン主義の時代のフランス音楽 ——革命なき進展」

七條めぐみ 愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

---

### 1. 講座の概要

2019年1月10日（木）18時より、愛知県立芸術大学音楽学部棟大演奏室Aにて、イヴ・フェラトン博士による特別講座が開催された。フェラトン博士はフランス・ロレーヌ大学の元教授で、18・19世紀フランスの音楽史を専門とする。ロレーヌ地方やリヨンの音楽生活についても研究を行い、ロレーヌ大学では長年、音楽学の教授として学部から大学院博士課程まで担当した。主著に、『リヨンの50年間の音楽生活（1903 - 53）』（1984）、編者としては『ロレーヌの音楽』（1994）などがある。

本学には2012年以降、数年に一度のペースで特別講座や大学院生による発表のために来学している。今回は「啓蒙主義からロマン主義の時代のフランス音楽：革命なき進展」というテーマのもと、18世紀後半から19世紀初頭にかけてのフランス音楽の変遷について、数多くの希少な音源とともにレクチャーを行った。

### 2. 講座の内容

本講座は（1）アンシャン＝レジーム（旧体制）の終わりから大革命まで、（2）大革命の時代、（3）ロマン主義の時代の3部で構成された。

#### （1）アンシャン＝レジームの終わりから大革命まで

第1部は、フランソワ・ジルースト（1737 - 99）のミサ曲で幕を開けた。この曲は、1775年6月9日のルイ16世の戴冠式のために、王室シャペルの楽長であるジルーストが作曲したものである。まさに、フランスにおけるアンシャン＝レジームの終焉を予告する曲と言って良いだろう。なぜなら、当時の逼迫する国家財政や、募る民衆の不満とは裏腹に、ルイ16世の妃マリ・アン

トワネットが贅沢三昧を続け、ついにはフランス革命を引き起こしたからだ。

続いて、ジェルヴェ＝フランソワ・クープラン（1759 - 1826）のチェンバロ曲〈ああ、うまくいくさ Ah, ça ira〉（1790）を聴いた。この曲は〈ラ・マルセイエーズ〉と並び称される革命歌に基づく変奏曲だが、すでに時代遅れの楽器となっ



レクチャーするフェラトン博士

たチェンバロと当時の民衆の歌が結びついている。第1部の最後には、ジャック＝マリ・ボヴァルレ＝シャルパンティエ（1766 - 1834）のオルガン曲〈イタリア方面軍の勝利〉（1796）を聴いた。この曲もまた、ナポレオンが指揮するフランス軍がイタリア戦役で勝利したことを祝う軍歌に基づきながら、教会の楽器オルガンを使用している点で興味深い。

## （2）大革命の時代

第2部では、革命期に作られた作品を、パリ音楽院の創立と発展という観点から追った。まずは、創設期のパリ音楽院でピアノ科教授をつとめたイニャス・ラデュルネ（1766 - 1839）の《ピアノ・フォルテのための3つのソナタ》（1797）、イアサント・ジャダン（1776 - 1800）の第2協奏曲（1798）、エレヌ・ド・モンジュール（1764 - 1836）のフーガ第3番（1800）を聴いた。ド・モンジュールは最初の女性ピアノ科教授となった人物で、パリ音楽院では女子クラスを教えた。彼女は苗字から分かるように、貴族である。フランス革命によって貴族は旧体制の象徴とみなされ、その多くが粛清されたが、ド・モンジュールはピアニストであることを理由に処刑を免れた。また、女性であることは職業上のハンデとならず、男性教師と同等に稼いでいたと言われ、才能と強運の持ち主だったと言える。彼女のフーガは、回顧的かつ「男性的」と見なされるジャンルを選択する大胆さと同時に、対位法の緻密さや音楽の運びの優雅さを感じさせる。

講座では続いて、革命期のパリにさまざまな国や地域から集まった音楽家たちの活躍に注目した。上述のピアノ教師の中でも、ラデュルネはオーストリア出身であるが、その他にアルザスにルーツをもつロドルフ・クロイツァー(1766 - 1831) のヴァイオリン協奏曲第 19 番 (1805)、ベルギー出身のフランソワ＝ジョゼフ・ゴセック (1734 - 1829) の《17 声のシンフォニー》(1809)、チェコ出身のアントニン・レイハ (1770 - 1836) の《新詩編》(1807) を取り上げた。このうち、レイハ (ライヒャ、ライシャとも) の作品はベートーヴェンのオペラ《フィデリオ》(1805) と同時期のもので、彼自身、パリにベートーヴェンの音楽をもたらしたうちの一人とされる。

### (3) ロマン主義の時代

第 3 部では、フレデリック・ショパン (1810 - 49) の《バカナール》(1830)、ジギスモント・タールベルク (1812 - 71) の〈モーツァルトのドン・ジョヴァンニの主題による変奏曲〉(1835) を通じてピアノの名手たちの音楽を聴いたうえで、エクトル・ベルリオーズ (1803 - 69) を軸とする 1830 年世代の音楽に進んだ。すなわち、ルイージ・ケルビーニ (1760 - 1842) とベルリオーズの二つのレクイエムである。講座では特に、レクイエムの中でも「怒りの日 *Dies irae*」の部分に注目した。前者は 1817 年にルイ 16 世の追悼のために書かれた作品で、混声合唱とオーケストラによる非常に劇的な音楽である。一方、1837 年のベルリオーズのレクイエムは、アンヴァリッド (廃兵員) の教会で演奏されることを念頭に書かれ、複数の分割合唱と 4 つの金管楽器群を擁し、初演は 440 人もの音楽家によって行われたと言われる。この巨大な編成によって、「怒りの日」の旋律を大音響で歌い上げるのである。

フェラトン博士は最後に、フランス革命をきっかけに社会は大きく変革したが、音楽はその間も脈々と続いていた、ロマン主義とはその前にあったものの帰結である、と述べた。豊富な音源をもとに独自の視点で音楽史をたどる、フェラトン博士ならではの講義に、出席者は熱心に聴き入っていた。